別紙１

論文審査結果の要旨

報告番号	甲・乙 第 3139 号	氏名	井　口　暁　洋
論文審査担当者	主査　宮　川　哲　夫 副査　中　村　大　介 副査　鈴　木　憲　雄		

論文題名：化学療法を施行した進行大腸癌患者の大腰筋筋量と栄養状態の経時的変化
掲載雑誌名：昭和学士会雑誌 81 巻、印刷中

現在、がんリハビリテーション対象患者のリハビリテーション介入時期における明確な介入指針は示されていない。本研究では化学療法を行った進行大腸癌患者 17 例を対象に、歩行能力に関係するといわれる大腰筋を CT の DICOM データから３次元大腰筋モデルとして作成し、3 次元大腰筋モデルの体積を筋量として計測した。そして大腰筋骨格比（PSPI)、栄養状態として、クレアチニン身長係数 CHI)、予後推定栄養指数(PNI)を、診断時（A 期)、前悪液質期（B 期)、終末期(死亡 1 か月前（C 期)にわけて、経時的な調査を行っている。また、リハビリテーション介入 10 例と非介入 7 例の比較検討を行っている。

結果は A-B 期は 251.0±207.0 日であり、B-C 期は 261.2±166.7 日であった。PNI は男女ともに経時的に A-C 期の計測時期ごとに有意に低下していた。CHI は、男性の B-C 期で有意に低下していた。女性は A-C 期にわたり低下はなかった。また、男女の PSPI と体重は A 期と B 期には有意な差を認め、B 期と C 期との間には差を認めなかった。リハビリテーション介入群と非介入群では A -C 期において、CHI は差を認めなかったが、介入群と非介入群のＣＨＩは、C 期に向かって緩徐に減少していき B-C 期における大腰筋体積の差は介入群では 8.3±20.7 ㎤、非介入群は−−19.57±14.0 ㎤であった。また介入群は大腰筋体積が減少しなかった症例が有意に多く、男女とも対象症例の PSPI と体重は A-B 期に有意な差を認め、B-C 期には差を認めなかった。PNI は男女ともに A-C 期にわたり低下しており、CHI は、男性の B-C 期で有意に低下していた。女性は A-C 期にわたり低下はなかった。

この結果から、診断時から前悪液質期に有意に減少していた。またリハビリテーション介入例は終末期であっても、非介入例と比較すると大腰筋体積の減少した症例は少なかった。リハビリテーション介入に関しては、可能な限り早期に行うことが望ましいことが示唆された。

本論文は本学大学院学位論文(博士)審査基準を満たしており、学位論文に値すると判断した。

（主査が記載）